

## 科学作品展

毎年、全国で小中学生の科学作品展が行われています。

相当歴史が長いのと都道府県によっては、科学教育施策の大きな柱として据えているところもある。

仕事柄、興味があり市町の展示会を見に行くことがある。

立派な賞の作品はすばらしい。内容もさることながら、まとめ方などの表現が立派である。

まさに、平成に入ってからの新学力観による教育や現在の思考力・判断力・表現力育成による教育の賜かのように思います。作品執筆の子どもさん、保護者、先生方に敬意を表します。

さて、実はわたくし、作品展では、大賞より参加賞や努力賞あたり（表現が悪ければお許しを・・・）の作品が好きなのです。

テーマはどうしても、よくあるもの、結果がわかっているもの、毎年出品されるもの、が多くなる。

しかし、これらを見ていると、作者の子どもが一生懸命取り組んでいる様子が目に浮かび、思わずほえんでしまいます。自分は、このほほえましい姿が大切だと考えています。

小学校低学年の子どもにとっては、月が形を変えて動いていくことやアリがどんな味の液体が好きなのか素朴なことに興味があるのです。大人は、「そんなわかりきったこと・・・」とっててしまいます。

しかし、彼ら彼女らにとっては大きな研究テーマなのです。

結果として、努力賞かもしれないが、「課題を見いだす、試してみる、結果が出た、できればここからさらに仮題が出て取り組む」の経験を積んだことは、賞を得ること以上に大切な経験です。



学校では、教科の学習内容に興味を持って学んでいる子どもは多い。しかし、これは公教育による最低基準の学習内容を習得させていることなので、制度上は受け身の学びである。

これに対して、自主的な探究活動は、課題→解決→納得のプロセスが自分の中から湧き出て、達成感が得られることである。これは、授業の中では時間的・内容的には及ばないところであろう。このような経験を積み重ねた子どもは、解決困難な課題に対する対応力を身につけ、社会に出てから学び続けることができる可能性が高いと思います。

最後に、自主的な学びは理科だけでないと考えている。国語、算数、社会、体育、図工、家庭、総合、道徳、英語活動どこでも可能であり、すべての学習内容と関わりあるのである。どれが大切というものではない。

さて、これからも「次に続く子ども」が科学研究にチャレンジするが、ぜひ子どもの自主性を大切にしたいものです。

秋、科学作品展が県内で開催されます。作品を読んでがんばった子どもの姿を思い浮かべたいと思います。もしかしたらその子がノーベル賞を取ったりして。そう思うとワクワクしてきます。